

第2回富士市立高等学校在り方審議会 議事要旨

令和8年9月2日(水)15:00~17:00

庁舎6階 第1・2会議室

1. 配布資料の確認

- ・参加委員及びオブザーバーに本日の審議資料について事前確認を行う。

2. 条例・規則の説明(事務局)

- ・事務局より、富士市附属機関設置条例及び富士市立高等学校在り方審議会規則に基づき、本日の出席者は 9 人中 9 人であり、過半数を満たしているため審議会が成立することが報告された。

3. 議事

●会長

皆さん、こんにちは。この暑い夏を、いかがお過ごしでしたでしょうか。

私は、前回の審議会の後、集中授業があり、その後も学会などで毎週のように出張しておりました。来週は、日本建築学会で「インクルーシブな教育環境を考える」というテーマのパネルディスカッションが開催され、パネリストを務める予定です。日本建築学会には学生時代から所属しており、在籍期間はもう半世紀ほどになります。

このテーマに関連して、先日、24 時間テレビがありました。建築学の先生方の間では、インクルーシブ教育とは、通常学級において、子どもたちがともに学ぶことだと捉えられています。一方、我が国では 2007 年に特別支援教育が本格的に導入され、その後、国連からもたびたび勧告を受けています。分離教育になっているのではないか、なぜ子どもたちが排除されなければならないのか、という指摘です。

今回のパネルディスカッションでは、「インクルーシブな教育を考える」というテーマは副題であり、主題は「個別と特別」となっています。これは非常に強い問題提起であり、個別の教育を受けるために、なぜその前提として通常の学級や学校とは異なる枠組みに入り、「特別」にならなければならないのか、という問題意識に基づくものです。

日本建築学会は、日本でおそらく最も規模の大きい学会であり、法人会員を含めると約 4 万人の会員がいます。その中で、教育学を専門とする者は本当に少なく、今回、教育学の代表のような立場で話をしなければならないことに、正直なところ苦悩を感じています。

そのような中、前回、第 1 回の委員会で配付された資料を読ませていただいたところ、校長先生が、今年 6 月の『生徒指導』に論考を寄せておられることを知りました。プロフィールには、校長先生が特別支援教育についてのご経験があり、幅広い関心をお持ちであることが記されていました。そのため、富士市立高等学校における探究学習や、いわゆる教育経営にも、そうしたご経験や知見が生かされているのではないかと思います。

目の前にいる子どもたちの実態や、急速に変化する地域の状況を見据えながら、近年急速に増えている不登校児童生徒も包摂していくことが求められています。これからの学校の在り方を考えることは、本審議会にとっても大きなテーマであり、重要な視点です。今回の審議会においても、そうした視点を生かしていく必要があると感じています。

委員の皆様には、改めて、それぞれのご経験や多様な視点を生かし、率直なご意見をお聞かせいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は第 2 回審議会ということで、第 1 回の審議会後に実施された市民アンケート及びこども向けアンケートの結果についてご報告があります。また、それらを踏まえた重点課題についての提案も予定されています。本日は、これらの内容が中心になるものと思います。委員の皆様には、アンケート結果や重点課題の提案を踏まえ、ご意見やご質問をいただければと思います。

では、議事に入りたいと思います。

本日は、まず第 1 章「本日の審議内容・前回審議の振り返り」について、事務局から説明していただきます。その後、ここまでの内容について、委員の皆様からご意見やご確認をいただきたいと思います。

続いて、第 2 章「市民アンケート・こどもの意見聴取の結果分析」及び第 3 章「課題整理・市立学校の魅力化に向けた 5 つの重点課題」について、事務局から説明していただき、その後、質疑及び審議を行いたいと思います。

資料が多いため、委員の皆様には事前にお目通しいただいておりますが、事務局には、委員の皆様が資料の内容を確認しながら審議を進められるよう、要点を押さえてご説明いただきたいとお願いしております。

説明の途中でも、ご意見やご質問がありましたら、どうぞ率直にお聞かせください。

事務局におかれましては、委員の皆様から十分にご意見をいただけるよう、説明を簡潔にまとめるなど、ご配慮いただいています。一方で、今回の審議における意見の根拠となる重要なアンケート結果でもありますので、必要な内容については、時間をかけて丁寧にご報告いただきたいと思います。

また、委員の皆様のご意見や論点の整理するため、事務局にワークシートも作成していただきました。ぜひ、それを活用しながら、本日だけでなく、次回以降も継続してご意見をいただければと思います。

それでは、事務局から本編資料の第 1 章について説明をお願いいたします。

<事務局から第1章の説明をする。>

●会長

ご説明をありがとうございました。

前回審議会の後の委員からのご質問とそれに対する事務局の見解についても、丁寧にご説明いただきました。委員の皆様から追加のご質問又はご意見等はございますでしょうか。

よろしいですか。では、引き続き本編の資料についての事務局の説明に戻ります。第 2 章、第 3 章についてご説明をお願いしたいと思います。

<事務局から第2章、第3章の説明をする。>

●会長

市民アンケートとこども意見聴取の結果及び分析について、大変丁寧にまとめていただきました。また、これらを踏まえて、課題整理として「5 つの重点課題」をご提案いただきました。

ここからが本格的な審議になるのだと思います。これまでにいただいた資料も含めて、富士市立高等学校でこれまで取り組まれてきた内容が、今回のアンケートやこどもへの意見聴取にも、一定程度反映されていると感じました。

特に、先ほど事務局からの説明の中で、中学校 2 年生・3 年生を対象とした聞き取り調査では、約 3 割の生徒が富士市立高校に訪れたことがあるということでした。富士市立高等学校は、県内でも様々な活動に取り組んでいますが、これはかなり高い水準なのではないかと思いました。

B 委員にお伺いしますが、最近の中学生の高校に対する見方は、どのようなものでしょうか。

●B 委員

最近は、県内高校でも、部活動の練習試合などを通じて、中学生と一緒に活動する機会が、以前に比べて増えているように思います。特に富士市は部活動が盛んなため、サッカーグラウンドや野球場などを訪れたことがきっかけで、市立高校を知るケースもあるのかもしれません。

●会長

そうなのですね。

さて、これから審議に入りますが、資料がかなり膨大ですので、まずは質問や確認事項について、委員の皆様からお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。「ここが分かりにくい」「この点を確認したい」といったことでも構いませんので、お聞かせください。

ちなみに、私から一つ質問があります。最初に示された元データについてですが、市民アンケートでは、スライド 9 ページに属性が示されています。市立高等学校に直接関わりのない市民を中心に、512 名が回答したということだと思いますが、この回答者について、年齢構成など、より詳しい属性を確認することはできますか。回答者の具体的な属性について教えていただければと思います。

●事務局

事前にアンケートを実施する段階では、年齢構成などについて、全体としてバランスが取れるよう大まかに条件を設定することはあります。ただし、無作為抽出の性質上、いただいた回答を属性別に分けて集計することはできません。

●会長

分かりました。この市民アンケート結果も重要になるので、念のため確認しました。

こども意見聴取の対象は、市内の中学校の 2 年生と 3 年生で 2,523 名と結構な人数になります。実際に高校進学を控える当事者ということで、意見聴取をしているということです。

これら基本的なデータも含めて、分からないことがあれば、事務局にお答えしていただきますが、いかがでしょうか。

●B 委員

膨大な量のアンケートを、とても丁寧に分かりやすくまとめていただいて、事務局の方に感謝したいと思います。

今後を考えるに当たり、県の学校づくり推進室長に 2 点お伺いしたいのですが、よろしいでしょうか。お答えいただける範囲で結構です。

1 点目は、富士市立高校を今後どのようにしていくかということです。魅力ある学校づくりについて審議することは十分理解していますが、学校は単独で存在するものではないため、富士地区全体の中でどのような位置づけになるのかが、非常に重要だと考えています。

前回も申し上げましたが、私は静岡市立高校の検討委員会に参加した経験がございます。その際、当時の県の室長にもご参加いただきましたが、静岡市立高校について協議する前提として、「静岡農業高校、科学技術高校、静岡商業高校の実業系 3 校については、県の拠点校として必ず単独で存続させる」という説明がありました。

当初は、工業科を設置する、高等専門学校にするといった案も出ていましたが、実業系 3 校を存続させるのであれば、それ以外の方向で議論しようということで、協議が進んでいったと記憶しています。

そこで、差し支えない範囲でお答えいただけるのであれば、富士地区における県立高校の今後の方向性について、何らかの考えがあるのかをお伺いします。

2 点目は、入学者選抜の在り方についてです。今後、例えば併願制の入学者選抜が導入される可能性を考えると、市立高校単独での入試を実施することは難しいのではないかと考えています。

一方で、富士市との関係において、例えば富士市立中学校の生徒を対象とした推薦入試を設け、富士市内の中学校から一定数、例えば 4 割または 5 割程度を事前に受け入れるといった入試形態が考えられるのかどうかについてもお伺いしたいと思います。

●県教育委員会学校づくり推進室長(オブザーバー)

まず、富士市立高校の立ち位置についてお答えします。

富士市立高校には、富士市内だけでなく、富士宮市をはじめとする他市からも生徒が流入しています。そのため、今後どのようにしていくかを検討する際には、まず富士市において、県が示したグランドデザインの内容や趣旨を十分に踏まえていただく必要があり、その上での議論になると考えています。

前回、おそらく県グランドデザインをご覧いただいたと思いますが、そこには富士市立高校が今後どうなるかについて、具体的には記載されていません。

したがって、現段階では、富士市立高校が今後どのようになるかによって、いわゆる「5 校から 3 校へ」という再編の組み合わせも変わってくる可能性があります。県民や市民の皆さんにとっても、どの学校とどの学校が一緒になるのかという点が、最も関心の高いところだと思います。

この点について、県教育委員会としては、富士市立高校の今後について、この在り方審議会の議論の行方をしっかりと注視しながら、連携していくというところまでしか、現時点では申し上げられません。

富士市立高校は、ビジネス探究、スポーツ探究、総合探究など、探究を重視した独自性のある特色ある学びを実践しています。今後、他校と統合する場合であっても、こうした学びをしっかりと受け継いでいく必要があると考えています。

例えば、富士市内の県立高校には、工業、国際、普通科、理数科などがあります。そうした学科や特色と富士市立高校の学びをうまく組み合わせ、統合するのであれば、より充実した学校づくりを進めていく必要があります。

一方、富士市立高校が単独で存続し、この会議の場で魅力ある学校づくりを進めていくということであれば、それはそれで、単独の学校として発展していくことになると思います。

いずれにしても、県として「こうしてください」とお願いするのではなく、まずはこの場で、富士市立高校が今後どのような学校になっていくのかを議論していただくことが重要です。その上で、単独で存続できるのか、あるいは先ほどお話のあった相互補完の観点から、県のどのような要素が必要になるのかを整理し、初めて次の段階の議論につながるものと考えています。

2 点目の入試については、所管が少し異なるため、この場では何とも申し上げられません。ただ、おそらく県立高校と同じような入試のあり方になっていくのではないかと考えています。

●B 委員

裁量枠が今後残るという仮定で考えれば、例えば、富士市内の中学校から一定数を事前に受け入れる入試形態等の表記をする程度ですか。

●県教育委員会学校づくり推進室長(オブザーバー)

委員もご存じのとおり、現在は、スポーツに限らず、ボランティアや探究活動など、様々な要素を対象とした裁量枠が設けられています。そのため、そうした枠の中に独自の項目を設け、学校としての特色を打ち出していくという考え方は可能だと思います。

●B 委員

承知いたしました。ありがとうございます。

●H 委員

市民アンケートについてですが、「中学生・高校生年代の子どもがいない」方が回答者の 77%を占めています。

富士市立高校が市民にとって魅力的な学校になるためには、今回のアンケート結果を活用すればよいと思います。

一方で、実際に定員を確保できるかどうかを考えるのであれば、中学生・高校生年代の子どもがいる世帯の保護者を対象としたアンケートを実施し、その結果を把握することが重要ではないかと思っています。

実際に生徒を確保することを考える場合、子どもがいる保護者から聞く感覚と、今回のアンケート結果との間には、少し開きがあるように感じます。中学生や高校生年代の子どもがいる保護者であれば、子どもの意向に近い回答になるのではないかと思います。

「富士市立高校を今後どのようにしていくか」の観点によって、アンケートの対象や設計も変わってくると思いますが、今回の市民アンケートを「市民の声の全て」と捉えてしまうと、きちんと定員を充足できるかどうかという観点では、実態と少しずれてしまうのではないかと感じました。

●会長

その点については、現在、アンケートをもとにご意見をいただいているところですので、今の H 委員のご発言も非常に重要だと思います。

市立高校と直接関わりのない方を中心にアンケートを実施したのは、市立高校に対する先入観をできるだけ持たずにご意見を伺うという意図もあったのだと思います。一方で、保護者の視点、特に子どもが進学を迎える段階にある家庭の視点も重要だと思います。この点について、事務局から何か補足することはありますか。

●事務局

はい、ご指摘のとおり、中学生年代を含む子どもがいる家庭と、そうした年代の子どもがいない家庭では、市立高校に対する見方に違いがあると思います。そのため、両者の意見を突き合わせ、そのギャップをしっかりと把握していくことが必要だと考えています。

一方で、今回のアンケートによって、市立高校と直接関わりのない方から見た市立高校の捉え方や見え方が、当事者のいる家庭とはかなり異なることも確認できました。この点については、今回のアンケート結果を一つの重要な資料として活用したいと思っています。

今後は、当事者のいる家庭と、そうでない家庭、それぞれの視点を突き合わせながら、市立高校を広く市の学校として捉えた場合に、どのような学校として設計していくべきかを検討していきたいと思っています。機会があれば、アンケートについても、今後どのような調査ができるか考えていきます。

●会長

今の話に関連して、当事者である校長先生にお伺いしてもよろしいでしょうか。答えにくい質問かもしれませんが、どのようにお考えでしょうか。

例えば、「保護者は高校教育についてどのように考えているか」といった観点に置き換えて、今回とは別のアンケートを実施することも考えられるのではないかと思います。

本日は非常に広い範囲を対象としたアンケート結果が示されましたが、校長先生は何かお感じになったことがありますでしょうか。

●市立高校校長(オブザーバー)

毎年、生徒の保護者を対象にアンケートを実施しており、その結果を必ず分析し、学校運営に生かしています。

H 委員がおっしゃったように、生徒の保護者は生徒の考えに比較的近い一方で、今回のアンケートの回答者とは、やや距離があるように感じます。

しかし、今回の結果も参考になるものです。市立高校は市の税金で成り立っている学校ですので、広報活動を通じて、学校のことを市民の皆さんにもっと知っていただく必要があります。その意味でも、今回のアンケート結果は、一つの重要な意見として受け止めたいと思います。

●会長

この点については、アンケート分析から、広報が十分でないというか、情報発信に弱い部分があることが明らかになりました。確かに、今後の課題だと思います。他にいかがでしょうか。

●E 委員

会長がおっしゃった、最初の属性アンケートの「属性 9」のスライドについて確認させてください。現在話題になっている中学 2 年生・3 年生を対象としたアンケートの「進学希望」とは、高校への進学を希望している生徒の割合を示した数値という理解でよろしいでしょうか。

●事務局

はい、そのとおりです。

●E 委員

承知しました。

●D 委員

この 5 つの重点課題は非常によく整理されており、事務局の方がご苦労されながら、丁寧にまとめてくださったことがよく分かります。

先ほど校長先生や H 委員からお話がありましたが、スライド 21 ページの「全体の傾向・視点⑧－1『その他・中学生の視点から』」を見ると、中学生が高校に進学して挑戦したいこととして、部活動の割合が大きいことが分かります。また、学校行事に対する期待も非常に大きく、この 2 つの視点は重要だと思います。

さらに、隣のスライドに示されている大学進学などの進路実績も重要です。どのような大学に進学できるのか、また、どのような企業に就職できるのかという点は、中学生が非常に高い関心を持っているところです。

私が小山高校の校長を務めていたとき、小山町・御殿場市の北駿地区にある 9 校の中学校を対象に、毎年、中学 3 年生の受験終了直後にアンケートを実施していました。その結果を見ると、毎年、部活動、学校行事、進路実績の 3 つが常に上位を占めていました。また、中学校の先生からも、「保護者もこの 3 点に高い関心を持っている」と伺っていましたので、これらが中学生が高校を選ぶ際に重視する項目だと考えられます。

したがって、今回示された 5 つの重点課題のうち、2 番と 3 番が特に重要だと思います。2 番は「進路実績」に関わる内容であり、3 番には「部活動」や「学校行事」が含まれると考えられます。この 2 つが、魅力ある学校づくりを進める上で、非常に大きなポイントになると思います。

ただし、「市立高校」の今後を検討するならば、1 番の「地域連携」も外すことはできません。

魅力ある学校づくりにおける優先順位を考えると、私の経験では、重点課題の中では 2 番と 3 番の優先度が高いのではないかと感じています。

●会長

今回の「5つの重点課題」について、委員からご意見がありましたが、質問や確認事項に限らず、事務局がまとめた「魅力ある学校づくりに向けた5つの重点課題」についても、ぜひご意見をいただければと思います。

また、ワークシートについても、これまでの様々な資料を踏まえて「5つの課題」を検討するために作成していただいています。ワークシートを活用しながら、ご意見を伺えればと思います。

ここで、まずは事務の担当から、ワークシートの内容を説明していただいてもよろしいでしょうか。

●事務局

本日お配りしたワークシートは、意見交換や今後の整理を円滑に進めるための資料です。メモ書き程度にご活用いただくものであり、提出を求めるものではありません。

今後につきましては、「5つの重点課題」について、妥当性を検討いただき、焦点を絞り、核となる考え方を整理したいと考えています。ワークシート上部に示している「(1)確認→(2)補足→(3)焦点化→…」という流れが、下の表に落とし込まれています。

ただし、本日は、全てを審議し、ご意見をいただく段階ではありません。先ほど D 委員からもご提言いただいたように、(3)の「焦点化」に向けて、1～5 の重点課題についての優先順位をお考えいただければ、それだけでも十分です。

また、可能であれば、これら「5つの重点課題」の内容の妥当性についてのご意見や、部活動、学校行事などに関する補足、つまり不足している部分を補うご指摘があれば、頂戴したいと思います。下の 2 番の表にあります「追加補足すべき重点課題」に「追加1」、「追加2」と欄がありますが、こちらにご記入をお願いします。

本日いただいたご意見については、事務局でも記録しながら、次回審議会に向けて、内容をさらに整理していきたいと考えています。

ワークシートは本日お持ち帰りいただくことになると思います。今後、「審議会後のご意見書」という形で、前回と同様にワークシートを送付させていただきます。その際には、本ワークシートに沿った簡単な記入用の様式をご用意しますので、皆様のお考えをまとめてご返送いただければと思います。次回の審議会を円滑に進めるため、ご協力をお願いいたします。

●会長

先ほどの D 委員のご発言は、焦点化という観点では、2 番と 3 番の重点課題の優先度が高いというご意見だったのではないかと思います。ただ、本日ここで結論を出す必要はありません。

事務局には、非常に多様なデータを丁寧に整理していただいています。今後、先ほど申し上げた確認や質問、委員の皆様からのご意見を伺いながら、重点課題を少しずつ絞り込んでいきたいと考えています。その際には、ワークシートを作成していただいていますので、これを活用しながら進めていきたいと思っています。

現時点で、意見がまとまっていなくても構いません。ご意見やご質問がありましたら、ぜひお聞かせください。

●F 委員

中学生を対象としたアンケートでは、「参加してみたい地域活動」として、地域イベントの企画・運営、子どもに関する活動、観光・まちづくりなどが上位に挙がっていました。

先ほど示された 5 つの重点課題の 1 番目には、「地元企業とのつながり」とありますが、ここに行政との連携も加えてはどうかと思います。富士市では、行政が様々な行政サービスを実施しています。前回の審議会後に提出したアンケートでも触れましたが、例えば富士まつりの企画・運営や、夏休み期間中の学童保育への支援など、高校生が関われる活動はあると思います。また、高齢者を対象とした取組など、行政サービスの中には、ほかにも高校生が参加できるものがあるのではないのでしょうか。

こうした行政とのつながりは、市立高校だからこそ実現できるものだと思います。高校生が行政の取組に関われれば、これまで課題として挙がっていた広報を特別に行わなくても、市民の皆さんに活動を見ていただく機会が増え、学校の認知度向上にもつながるのではないかと思います。

教育と行政では立場が異なるため、実現は難しい部分もあるかもしれません。

しかし、企業側の立場から見ると、富士市立高校はこれまでも企業と連携してきたと思いますが、さらに実学的な取組を進めようとなると、企業側にも難しさがあると感じます。

例えば、経営者が取組の意義を理解していても、従業員に対して、「なぜ実施するのか」を十分に説明できない場合があります。また、企業は一定の利益を上げる必要があるため、連携に割ける時間や人員には限界があり、現状以上の協力が難しい企業も多いと思います。

その点、行政であれば、最終的には行政サービスの一環として実施できるため、高校生との連携が進めやすいのではないかと感じました。先ほどの「地元企業とのつながり」という表現に、行政との連携は含まれていないように思いますので、行政とのつながりも加えて検討してはどうかと思います。

●事務局

ご意見ありがとうございました。

現在、行政の立場からも、富士市立高校と様々な形で連携して支援しております。今回の 5 つの重点課題には「行政」という言葉が明示されていないのですが、実際にはこれまでも多くの連携事業を行ってきました。もちろん行政とのつながりも含めて考える方が、実態に即しているのではないかと思います。

市立高校である以上、行政と協力しながら取り組むことは当然ながら重要です。県立高校に行政との連携がないということではありませんが、富士市立高校と行政は、非常に密接な関係にあります。そうした点も踏まえて、重点課題を検討していただければと思います。

●A 委員

まず、これほど膨大なアンケート結果を整理し、非常に丁寧な資料を数多く作成していただき、ありがとうございました。私自身、以前、事務局の仕事に携わっていた経験がありますので、事務局の方のご尽力は本当に素晴らしいものだと感じながら拝見しました。

先ほどのアンケートについては、私も同じような感想を持ちました。学校に勤務している立場からすると、保護者

の方々は、おそらく中学生の回答に近い意見を示すのではないかと思います。そのため、今回のアンケートは大変興味深いものでした。市立高校と直接関わりのない一般の方々が、学校をどのように見ているのかを知ることができたという点でも、貴重な意見だと思います。

一方で、今後の議論においては、今回の市民アンケートの結果にあまり引っ張られすぎることなく、中学生の声を大切に取り上げていく必要があると考えます。中学生年代の子どもを持つ保護者の意見も、ある程度そこに反映されていると考えられますので、データについては、そのような捉え方で扱っていければ良いと思います。

中学生の意見を踏まえると、やはり「出口」をどのように確保するかという点が、非常に重要だと感じます。学校でどのような教育を行うかということは、最終的には、子どもたちをどのような進路に送り出すかということにつながります。

例えば、在校生や中学生に対して、卒業生がどのような大学に進学しているのか、どのような企業に就職しているのか、市立高校で学ぶことでどのような未来が開けるのかを、具体的に示せることが重要です。そうした進路実績や将来像をしっかりと確保することが、目指す学校の方向性を定める上で大きな要素になると思います。

冒頭の説明にもありましたが、県立高校のあるべき姿として示された 3 つの方向性のうち、富士市立高校がどこを目指すのかについて、委員の皆さんが共通認識を持った上で議論を進める必要があると思います。第 1 回の資料のスライド 11 で示された公立高校のあるべき姿には、「グローバルリーダーを育成する学校」、「実学系教育を充実させる学校」、「多様なニーズへの対応とエンパワメントを進める学校」という方向性がありました。

富士市立高校がこれまで積み重ねてきた歴史などを考えると、2 番目又は 3 番目、つまり実学を中心とした学校、あるいは多様なニーズに対応する学校を目指す方向が適しているのではないかと考えます。「実学」を中心とするのであれば、商業高校を母体としてきた経緯も踏まえ、県立高校の工業系の学校などとの役割分担や、教育資源の在り方についても見直す必要があるでしょう。また、「多様なニーズへの対応」という観点では、冒頭に会長もおっしゃっていた、特別な支援を必要とする生徒も含め、誰一人取り残さない学校を目指すことが重要だと思います。そうした方向性が、富士市立高校の将来像として適しているのではないかと感じています。

中学生を対象としたアンケートでも、将来像や、どのような力を身に付け、どのような高校生活を送りたいかという点が示されていました。今回の「5 つの重点課題」でいえば、課題 2 番の「入口」、つまりどのような生徒を受け入れるのかをどのように確保するかという点と、課題 3 番の「幅広い学力層に対応し、誰一人取り残さない」という点が重要になると思います。この 2 つを重視することで、富士市立高校が目指す学校の方向性が定まっていくのではないかと感じています。

その上で、高校で行っている教育活動を、どのように子どもたちの将来像や進路に結びつけ、具体的な未来として示していくかが重要です。

例えば、「実学」を中心とするのであれば、「富士市立高校で努力すれば、市役所などの行政機関への就職につながる」、「富士市の行政や地元企業で、多くの卒業生が活躍している」、「地域の企業で働く道が開ける」といった、具体的な魅力や強みを打ち出せる学校を目指してはどうかと思います。今回のアンケート結果を見て、そのような方向性が望ましいのではないかと感じました。

●会長

ありがとうございます。市民アンケートと中学生の意見を比較しながらご発言いただきました。先ほどのご質問とも関わりますが、中学生の意見には、保護者の意見もある程度重なっているのではないかとのことですね。

また、「5つの重点課題」については、課題2番と課題3番が特に重要であり、そこがポイントになるのではないかとのご意見でした。

さらに具体的には、市役所などへの就職につながるような「出口戦略」があってもよいのではないかと、ということですね。サッカーや野球などの分野も含め、企業と連携しながら取り組み、子どもたちが夢を持って目指せるものをつくっていくことが、富士市立高校の魅力につながるのだと思います。他にはいかがでしょうか。

●G 委員

私が申し上げたいのは、富士市立高校は、最終的には富士市を好きになり、「富士市で頑張りたい」と思う人を育てる学校であってほしいということです。

先日、探究学習の冊子を読ませていただいた際にも、市と連携しながら学習を進めることで、生徒が市の仕組みを理解し、富士市を好きになるきっかけが生まれるのではないかと感じました。これは、前回、私自身が認識したところです。

先ほど、富士市立高校が単独で存続するのか、再編されるのかという話がありました。私は、事前に資料を読んだ上で、富士市立高校は単独で存続していくのではないかと考えていました。

しかし、H 委員もおっしゃっていましたが、定員を確保するためには、子どもたちに「受検したい」と思ってもらうことが必要です。そうでなければ、学校の存続も難しくなるのではないかと思います。

その点で、私が中学生を対象としたアンケートで注目したのは、11 ページの質問 4 です。「高校でやってみたい学びは何ですか」という項目ですが、大学受験に向けた学習、資格取得につながる学習、スポーツに関する学習が、上位を占めていると考えています。そう考えると、大学進学を目指す学校であると同時に、就職もできる学校、そして先ほど A 委員がおっしゃったように、誰一人取り残さない学校を目指すことが重要だと思います。

現在の富士市立高校は、スポーツにも力を入れており、探究学習にも取り組んでいます。こうした強みを生かしながら、就職面についても充実させていくことができるのではないかと思います。

具体的にどのように進めるかは、これから検討する必要がありますが、大学進学を目指すことは、高校選びにおいて大きな魅力になります。もちろん就職にも対応し、できれば富士市内で就職できる道を示していくことも重要です。また、一度は東京などへ進学・就職したとしても、最終的には富士市に戻り、地域に貢献したいと思う人を育てるという考え方もあると思います。

そのためにも、現在の探究学習をさらに充実させていくことは有効だと思います。また、サッカーなどの部活動も非常に盛んですので、部活動を通じて大学進学を目指すなど、様々な進路につながる道を示せるとよいと思います。

大学進学、就職、スポーツや探究学習といった複数の強みを生かしていけば、中学生や保護者の方々に「富士市立高校に進学したい」と思ってもらえる学校にできるのではないかと考えています。少し単純な考えかもしれませんが、以上のように思っています。

●会長

G 委員のご意見は、事務局で整理していただいた内容でいうと、「視点 2」に関わるものだと思います。中学生への意見聴取の結果にも示されていますが、現在の富士市立高校の実績は、ある意味でこの方向性に沿っているの

はないでしょうか。

実際、既に様々な取組が進められているように感じます。校長先生から、何かご意見はありますか。

●市立高校校長(オブザーバー)

沼津市、静岡市、浜松市などの市立高校から進学・就職した卒業生のうち、どの程度の方々が市に戻ってきているかは分かりませんが、今回の本校アンケートでは、卒業生の人数は多くないものの、5 割以上が富士市に戻ってきているという結果が出ています。

やはり、富士市の子どもたちが富士市に戻り、地域で活躍できるような学校をつくりたいと考えています。15 年前に、富士市立高校へ移行した際には、「どのように地域へ還元していくか」について、相当検討されたのだと思います。

現在、本校の 2 年生が取り組んでいる「市役所プラン」では、行政や企業と連携しながら、どのようにすれば富士市をより良い街にできるかを、生徒たちが考えています。こうした考えを持った生徒たちが、卒業後に富士市に戻り、市役所に就職するケースも増えてきました。

吉原商業高校の卒業生が、どの程度市役所に就職しているかは分かりませんが、富士市立高校の卒業生は、かなり市役所に就職していますので、その意味では、富士市に還元できているのではないかと感じています。

どのような学校をつくるかを考える中で、私は卒業式でいつも生徒たちに「富士に戻ってきてください」と伝えています。県立高校に勤務していたときには、そのようなことは一度も言いませんでした。県立の進学校では、生徒たちが卒業後に地域の外へ出ていくことが多く、なかなか戻ってこないからです。

だからこそ、富士市立高校の生徒には、将来、富士市に戻ってきてほしいと願っています。現在、地域に若い人が戻ってきていないため、地域のコミュニケーションが十分に成り立っていない面があります。区長や組長の皆さんも大変苦勞されていますが、地域の自治活動に少しでも関わる子どもたちが増えれば、この街を維持していくことにもつながるのではないかと思います。

オブザーバーという立場ですので、これ以上は差し控えますが、現在、外国人が非常に増えている状況も踏まえ、教育の中で、どのように共生していくかということも考えています。

●会長

今回のアンケート結果は、現在の富士市立高校で実際に行われている教育活動に、かなり沿った内容になっているように感じます。

個人的には、特に部活動について注目しています。富士市立高校では、地域におけるプロスポーツなど、競技スポーツとの関わりが非常に強く、県外から入学してくる生徒もいると聞いています。県外から生徒が集まることについては、これだけ魅力的な活動を行っているのであれば、意義のあることだと思います。

県の学校づくり推進室長にお尋ねします。今後の高校教育の在り方を考える上では、県外から生徒を受け入れる場合、税金の使い方について課題もあるのではないのでしょうか。県外から来た生徒に、地域の税金を使うことへの議論もあると思います。県外から入学する生徒への対応について、現在、県教育委員会で何か検討されていることはありますか。差し支えない範囲でお聞かせください。

●県教育委員会学校づくり推進室長(オブザーバー)

例えば、全国募集を実施している学校としては、土肥分校や川根高校があり、佐久間分校でも今年度から開始しています。また、海外帰国生徒枠を設けているほか、一定の条件を満たせば、一家転住などの理由で県外から入学できる場合もあります。

その他、湖西高校や新居高校には、隣接する愛知県の豊橋市から通学している生徒もいます。自宅から通学できるのであれば、県外からの入学を認めている学校もあります。

一方で、今回議論になっているように、市税や県税を県外から来る生徒のために使ってよいのかという問題については、やはり議論が生じるものだと思います。

●会長

県内外を問わず、さまざまな地域から生徒を受け入れることについては、富士市立高等学校の在り方を検討する上での背景の一つになっていると思います。この点についても、委員会として押さえておく必要があるのではないのでしょうか。ほかに委員の皆様はいかがでしょうか。

●E 委員

先ほど D 委員がおっしゃったように、課題 2 と課題 3 が重要であるという点については、私もそのとおりだと思います。

また、課題 1 と課題 3 は互いに関連しており、課題 2 と課題 5 も関連しています。一方で、課題 4 は財政的な側面があるため、他の課題とは少し議論の性質が異なるものだと思います。

課題 1 と課題 3 は、最終的には「地域」という言葉に収れんされます。地域について考える際、事務局の方には富士市の課題に関する資料を非常に丁寧に調べ、分かりやすく整理していただきました。富士市には、総合計画のようなものがあると思いますが、その中には、他の自治体と同様に、高齢化の問題のほか、校長先生がおっしゃった地域コミュニティの問題、近年関心が高まっている防災の問題、インフラ整備の問題、人材不足など、様々な課題が示されているのではないのでしょうか。

先ほど、約 70%の市民が市立高校と直接関わりがないという話がありましたが、実際、富士市立高校に直接関わっている市民の方は、さらに少ないでしょう。

しかし、こうした課題と学校を結び付けて取り組んでいけば、そうした一般の市民の方々にも、市立高校の存在意義を理解していただけるのではないかと思いますし、自分たちが納めた税金が市立高校に使われていることについて、納得していただくための説明につながるのではないかと感じます。

また、課題 2 と課題 5 は、「教育」や「進路」という言葉に収れんされると思います。富士市立高校の魅力ある教育をつくるためには、先ほどから話が出ているように、例えば会長の大学とビジネス探究科が連携を深めたり、スポーツ分野で中京大学と連携したりすることも考えられます。富士市において、小学校・中学校・高校までが市内で完結できるのであれば、その先の大学とも連携を深めることが重要です。

一方で、市役所や地元企業への就職など、卒業後に地域へ戻ってくる進路という観点からも、取組を進めることができると思います。進学と就職の両面から、学校と地域とのつながりを考えていけるのではないのでしょうか。

今回の資料は、本当に頭が下がるほど丁寧にまとめられています。先ほど A 委員もおっしゃっていましたが、事務局の皆さんのご苦労は、想像するに余りあります。

なお、今後、こうした自由意見を整理する際には、既にご存じかもしれませんが、テキストマイニングを活用するのもよいのではないかと思います。キーワードを抽出し、出現頻度に応じて大きさを変えて表示することで、意見の傾向を視覚的に把握できます。市の企画部門でも、おそらく活用されているのではないのでしょうか。そのような方法を使うと、自由意見の内容をより分かりやすく整理できると思います。

●会長

委員の皆様から様々なご発言をいただいておりますが、C 委員からも、率直なご感想やご意見がありましたら、一言お聞かせいただけますでしょうか。

●C 委員

まちづくりの観点から申し上げますと、中学生を対象としたアンケートでは、「地域の活動があれば参加したい」「自分たちで企画してみたい」といった回答が多く見られましたので、そうした意欲を伸ばせるような授業内容を、今後さらに充実させていただければと思います。生徒が、大学進学や就職などで一度地元を離れたとしても、将来、富士市に戻ってまちづくり活動に携わってくれば、大変心強いことだと思います。

ひとつ、分からない言葉がありました。資料 6 の「富士・富士宮地区の高校再編イメージ」の上部に「ふじの学び」という言葉がありますが、これはどのような意味でしょうか。

●県教育委員会学校づくり推進室長(オブザーバー)

お答えします。前回の審議会資料に掲載された県グランドデザインに示されている内容です。前回資料のスライド 26 をご覧いただくと、左側に富士山の絵があると思います。そこでは、「先進的な探究学習」と「質の高い専門性」の相乗効果によって生まれる学びを、「ふじの学び」と位置付けています。

これは、特定の学校だけで実施するものではありません。富士・富士宮地区で再編される 5 校全てで展開していくというイメージです。

そのためには、「ふじの学び」を展開するための不可欠な教育基盤として、コースや学科の設定、施設・設備の整備などを進める必要があります。また、場合によっては、再編そのものを進めていく必要もあると考えています。

簡潔に言えば、「先進的な探究学習」と「質の高い専門性」を組み合わせで展開する学びが、「ふじの学び」です。

なお、富士宮市では、義務教育段階から「富士山学習」などに取り組んでいます。そのため、富士・富士宮地区で新たな学びを生み出すに当たり、表記を漢字にするか、カタカナにするかなども検討しましたが、最終的には「ふじ」と、ひらがなで表記することとなりました。

●会長

「富士山学習」も話題に出ましたが、総合的な学習の時間における取組としては、静岡県内にとどまらず、全国的にもよく知られている学習だと思います。そうした教育の土台があり、全ての生徒が富士市立高校に進学するわけではないものの、小学校・中学校での学びが高校での学びへとつながっていくという点で、富士市には一貫した教育のつながりがあるのだと思います。

●県教育委員会学校づくり推進室長(オブザーバー)

やはり、先ほど先生がおっしゃったように、地域を知り、地域を愛する子どもたちを育むことが、教育の土台になっているのだと思います。

●C 委員

まちづくりの観点からも、まさにその言葉が当てはまります。つまり、「地域を知ってもらい、愛着を育み、地域を革新する」という流れです。地域を知り、愛着を持った子どもたちが、将来、地域に戻ってきてまちづくりに参加し、新たな変化を生み出してくれる。まさにそのような循環だと思います。

●会長

委員の皆様からは、まだ全体像をイメージしている段階とのお話もありましたので、「5つの重点課題」について、引き続きご意見をいただければと思います。

現段階では、「5つの重点課題」を確定する必要はありません。今回は、事務局に非常に多くのデータを整理していただきましたので、まずはその内容を確認し、分かりにくい点について意見交換を行いました。また、このような方向がよいのではないかというご意見もいただくことができましたので、次回の審議会につながる議論ができたのではないかと思います。

この後、分かりにくい点などがありましたら、先ほどお話ししたとおり、事務局に質問をお寄せいただければと思います。前回と同様に、ワークシートも活用しながらご意見をお聞かせいただき、次回の審議会につなげていきたいと考えています。

委員の皆様から、ほかに不足している点などはございませんか、よろしいでしょうか。ありがとうございました。

それでは、第5章「総括・その他」に移ります。会の進行を、事務局にお返しします。

4. 今後の進行・閉会

- ・前回審議会に引き続き、委員のご意見を整理・集約して次回審議会に反映させるため、後ほど事務局担当から各委員へ「審議会後のご意見書」をメール送付する旨が説明された。
- ・次回審議会は11月に予定されている旨が共有された。
- ・事務局より、長時間の審議への謝辞があり、本日の審議会は終了した。